ソーシャルアクションアカデミー2022 ソーシャルリサーチ学科 調査報告資料について

本資料は、NPO・プロボノワーカー・学術研究者の三者による協働のプログラム「ソーシャルアクションアカデミー／ソーシャルリサーチ学科」（認定NPO法人サービスグラント主催）で行った、**プロボノによる調査資料**です。
2022年度は、子どもや若者をめぐる課題の連鎖を断ち切り、希望をもたらす取り組みとして、**「フードバンク」「養育困難家庭の訪問型支援」「面会交流」**の３テーマをめぐる６件の社会調査を行いました。

本資料を引用される際は、出典について、以下の例を参考に記載いただきますようお願いします。

1. **資料のフッタにコピーライトを表示**
   【記載例】
   ©ソーシャルアクションアカデミー
   ©Social Action Academy
2. **引用箇所の末尾等に資料の出所を表示**
   【記載例】
   資料：ソーシャルアクションアカデミー
   資料：ソーシャルアクションアカデミー 2022年度調査報告書より
   資料：認定NPO法人サービスグラント『ソーシャルアクションアカデミー』2022年度調査報告書より

※本調査報告は、多様な主体のネットワークのハブとなる学際的・横断的な研究プロジェクトを推進する実験的な取組「ソーシャルアクションタンク」に成果として蓄積・公開しています。
そのため、一部の報告書は、「ソーシャルアクションタンク」のひな型を利用しています。

お問い合わせ

認定NPO法人 サービスグラント（担当：小林・岡本）
SAA@servicegrant.or.jp
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-2-10
〒541-0047 大阪市中央区淡路町2-5-16 淡路町ビル8階
https://www.servicegrant.or.jp/

補助金・助成金ヒアリングに対するKJ法を用いた分類結果

分類	下位分類	切片・発言の例	総回答数	割合	
団体ごとの実現可能な申請と、情報発信	実現可能性	経験の浅いフードバンク団体の審査の際は、実現可能性を重視（人員体制、ノウハウ） 申請の問題：実現可能性（予算ありきの計画） フードバンク申請は、ロジをちゃんと回せるかを重視 審査の着目点：実現可能性、予算の妥当性、団体の信頼性	5	3.5%	
	持続可能性	活動の継続性という点では、助成以外の財源を確保すること 審査の着目点：実現可能性、予算の妥当性、団体の信頼性 助成金を人件費・家賃に充てるのはややむを得ないが、自主財源比率を高める努力も申請書に記載すべき 複数年度の助成の場合、自主財源比率を重視 人件費全てを助成金に頼るのは良くない（組織の持続可能性からNG） 出口戦略（助成が終わった後の持続性）や年毎の傾斜配分などを意識した助成制度設計をすることも大事	6	4.3%	
	予算計画	身の丈にあった申請を行い、着実に経験を積むことが重要 盛らずに正直に申請してほしい 身の丈のあった申請かどうかを重視（扱い切れないような多額の申請をしていないか） 助成金額の妥当性はちゃんと見る（多寡にかかわらず） 予算の妥当性は最も大事なポイント（どの申請が最も効率的に回せるか） 申請の問題：積算根拠が示されていない	10	7.1%	
	実績	審査書類に含まれていなくても過去の実績を調べる 過去の助成実績は、団体の信用度の指標の一つ 助成採択から、企画力・実績・ネットワークを見る 「過去に公的機関と連携しているかどうか」については、団体の社会的信用度の指標として参照	7	5.0%	
	広報	ウエッブサイトの更新頻度、内容、財務諸表、事業報告、情報公開、お礼の言葉を重視 財務諸表や事業報告書を重視。その重要性に気づいていない団体が多い。 助成事業の報告書（成果・反省・助成使途）をもっと作成・公表すべき 申請書だけでなく、ウエブサイトやSNSも使って団体情報を収集	11	7.8%	1
	地域制	フードバンク活動が根付いてない地域にこそフードバンクの活動を育てていきたいという気持ちがある 地域に同種の活動をしている団体がなければ、意識的に選択する 広域で見た時の必要性も考慮すべき	3	2.1%	
	新規性	フードバンクにとって周辺事業の実施、その地域だけの活動は新規性となる フードバンクは食料支援というインフラなので、新規性は生み出しにくいということは考慮してもよい。とはいえ単なる継続では採択すべきでない ターゲットのちがいで差別化を図る、活動を見直してオリジナリティーを掘り下げてみるなど、自団体のことだけでなく周りと比較して考えることが、戦略的に助成事業を活用する上で重要 申請のたびに事業内容をコロコロ変える（「質的ちぐはぐ」）ようではダメ。新規性と事業性を合わせて審査する。	5	3.5%	
	申請のポイント	申請は情報戦である。競争率が低いところを探す 審査員の中でも、中身（事業内容）を重視する人や基盤（会計など）を重視する人など、重点ポイントが分かれる 助成金の違いを認識しよう。構造化してとらえ、自分がどこに該当する助成に申請しているか整理する必要がある どのような主旨の助成か把握していないと、意図せずして重複助成不正になることがある 「ふかふか」の団体（経験・ネットワークを持つため効率が良く、同じ助成金でも多くの団体を支援できる団体）を、そうでない団体（「かちかち」）よりも選ぶ フードバンクではない他団体に申請書を査読してもらい、壁打ち役になってもらうことをお勧めする	8	5.7%	2

ニーズ・ディテールに基づき、開かれた団体活動	ニーズ・ディテール	どのような形で支援を必要としている人につながろうとしているかを重視 フードバンク団体の審査には、どういった人に最終的に食料が届くかを意識 本来のNPO活動は、現在の社会制度からこぼれたニーズを支援するもの フードバンク活動は、支援先の反応を直接得やすいため、反応やアンケート結果、ニーズ を申請書に書いてアピールできる ディテールの話（現場の具体的な話が）がある申請書は信頼する ディテール（数字、具体性）を重視。地域・団体特有のエピソードなども フードバンクの活動は困窮者支援だけなく、食品ロス削減の観点もある 悪意は無くても、ディテールを把握していないため、問題解決がなんとなく、になっている 申請内容がポエムだけで終わらないように（数字・具体性を示す） クラウドファンディングは上辺だけでも良いが、助成金は地味でもいい仕事をしている団体に出してあげたい 悪意は無くても、ディテールを把握していないため、問題解決がなんとなく、になっている	16	11.3%
	ネットワーク	NPOは本来ネットワークしか資源がない 開かれた活動：市民参加を広げることを考えるべき フードバンクは行政や福祉機関とのネットワーク は必須で、申請書にも記載すべき 閉じた組織で、市民からの寄付やボランティア参加もなければ、本来のNPOとは言えない 閉鎖的で対象が限られていて活動の実績が見当たらないのは信頼性NG 市民に開かれた組織かどうかは重要なポイント（事業報告書、財務諸表、ウエブサイト当） 日々の業務に忙しすぎて周囲とのネットワークづくりまで気が回らない団体も多い 助成事業申請は単に知っているかどうかが重要になる場合があるので、先輩の団体などや地元の中間支援団体などのつながりが重要	9	6.4%
	自主性	新規団体は、自分たちで情報を収集する、先輩団体と繋がるなど、自助努力が必要 新規団体は、相談先を常に持つべき 新規団体は、多少の実績を出してから申請してほしい（そうでなければ、助成期間中に活動を開始できないなどの問題が起こる場合がある） もう少し自分から情報収集をして欲しい 他のフードバンクから学ぶ申請も良い（視察など）	11	7.8%
	経験の浅い団体の審	小規模な助成により団体のチャレンジを促したい 経験の浅い団体の審査に対して、特に配慮することは無い フードバンク団体と他団体の審査判断に大きな違いは無い 助成金を必要としている小規模団体にお金が回ることを意識して採択団体を検討する NPOでは小さい、経験が浅いから悪い、ということは無い 無形資産・無形資本を構築すべき：ネットワーク（データ・ノウハウ・ネットワーク島）の構築、ニーズや支援者リストの情報、行政からの信頼、連携	6	4.3%

人やノウハウが育つ仕組み	助成種類・仕組み	ストック型の助成を増やし、バックオフィスを充実させるべき 組織助成はコスパが良い、事業補正は波及効果が薄い スタートアップへの助成は少ない 助成事業こそイノベーションが遅れている 助成金が大きくなると成果指向になってしまうが、過度な成果指向・管理指向はさけるべき 原資が税金だと、かなり保守的な判断が求められる コロナ禍以降、お金を出すだけでなく、基盤強化に向けた非資金的支援（労務や会計のやり方を教えるなど）の動きも出てきた 審査側の理解・認識が遅れている	14	9.9%	
	要件緩和	単年度では人やノウハウが定着しない 要件を厳しくし過ぎると、予算ありきな事業計画を立てるケースが出てくる 一年ごとの公募型、審査有りの補助金・助成金よりも、経常的にお金がシステムに移行すべき 複数年度を対象とした助成を増やすべき 計画的に乗が実施できるように、期間を長くすべき 自治体のは使い勝手が悪いので、企業の助成を探した方が良い 人件費を認めない補助金・助成金が多い。法的根拠はなく、単なる慣習	11	7.8%	
NPOや助成全般	その他	NPOが大きくなるとバックオフィス業務が重要となってくるが、それを志望する人が少ない NPO運営には、支援と経営の両方の視点が必要。日本は後者が少ない 大型助成では、団体のガバナンス、コンプライアンスなど組織基盤も問われるものもある 志や土台はしっかりしていても、方法論・構造が間違っている場合がある クラウドファンディング(CF)と助成は全く異なる。前者は共感・話題・短期決戦・寄付に近い。後者は信頼・実績・データ・長期的 アドボカシー（政策提言）と助成金の話は共通する部分が多い 団体間の連携は弱い	19	13.5%	3
			141	100.0%	